

(2) 「真のお母様を地上世界から探し出す」というみ言をもって、「お母様の無原罪誕生」を否定しようとする誤り

真のお父様は、「主（再臨主）がこの地上で探される新婦は……墮落していない純粹な血統をもつて生まれた方」（「祝福家庭と理想天国Ⅰ」909ページ）であると語っておられます。これは、真のお母様の語られる「独り娘」のみ言が正しいことを裏づけるみ言です。

真のお父様は、「（メシヤは）愛する子供一人で何になるか。子供自体は、その相対者（真の母）を得なければならぬ。相対者をどこから得るか。天上から得るんぢやない。墮落の結果地上で失ったんだから、地上で再創造しなければならない」（「祝福家庭と理想天国Ⅱ」872ページ参照）と述べておられます。それに対しUCIを支持する人物は、お母様を天上（靈界）からではなく、地上世界から探し出すということをもって「お母様の無原罪誕生」を否定しようとします。しかし、このみ言は、イエス様が地上で「真の母」を探し立てることができず、十字架の後、復活されてから聖霊という「靈的眞の母」を立てられましたが、そのようにして「天上から得る」のではなく、地上で実体であられる「眞の母」を探し立てなければならないことを意味するみ言です。

私たちが理解しておかなければならぬことは、「原理講論」の「終末論」に、「人類歴史の目的は、生命の木を中心とするエデンの園を復帰するところにある。ところで、エデンの園とは……地球全体を意味するのである」（145ページ）と論じられているように、「エデンの園」が「地上世界」を意味しているという事実です。

再臨主の誕生についても、「再臨が、地上に肉身をもつて誕生されることによつてなされる」（「原理講論」577ページ）と論じられているように、人類歴史の終末期において、メシヤが再臨されるならば、この地上世界に「復帰されたエデンの園」が再現され、メシヤはそのエデンの園（地上世界）においてエバ（眞の母）を探し出されて聖婚されるのです。それゆえ、「地上世界から探し出して復帰する」というみ言をもつて、「眞のお母様の無原罪誕生」を否定する根拠とはなりません。

## ②人間始祖の「靈的墮落のみのときの救援摶理」について

エデンの園の中にいるエバは「無原罪」であり「神の血統」であることを知らなければなりません。

エデンの園のエバは、靈的墮落をしたとしても、まだ神の救いのみ手が届く圏内にいたのです。

ところで、UCIやサンクチュアリ教会を支持する人々が、「お母様は無原罪で誕生された方ではない」として、眞のお母様の無原罪誕生を否定するために用いるみ言に、次のみ言があります。

「アダムが責任を果たすことができなかつたために墮落したので、その責任を完成した基準に立つには、エバを墮落圈から復帰して再創造し、善の娘として立つたという基準に立てなければなりません。そのようにしなければ、アダムの完成圈が復帰できないのです」（「眞の父母の絶対価値と氏族的メシヤの道」38ページ）

「眞の母がサタンに奪われたので、本来の人間（メシヤ）は、死を覚悟してまでも、サタン世界から（眞の母を）奪い返してこなければなりません」（「祝福家庭と理想天国Ⅰ」561ページ）

眞のお父様は、天の父母様（神様）と完全一体となつておられ、その語られるみ言に矛盾はありません。前述したお父様のみ言にあるように、眞のお母様は「独り娘」としてお生まれになつています。では、これら二つのみ言をどのように理解すべきでしょうか。

眞のお父様が、「アダムが責任を果たすことができなかつたために墮落したので……」とか、「眞の母がサタンに奪われたので、本来の人間（メシヤ）は、死を覚悟してまでも……」と語つておられるように、

これらの言は「エデンの園」において起こったアダムの堕落の問題に対する「メシヤ（アダム）自身による蕩減」、メシヤ（アダム）自身の責任について述べているものです。

「原理講論」には、失樂園前の「エデンの園」において、もし、アダムが墮落せずに完成していたならば、復帰摂理はごく容易であったとして、次のように記しています。

「エバが（靈的）堕落したとしても、もしアダムが、罪を犯したエバを相手にしないで完成したなら、完成した主体が、そのまま残っているがゆえに、その対象であるエバに対する復帰摂理は、ごく容易であつたはずである。しかし、アダムまで墮落してしまったので、サタンの血統を継承した人類が、今日まで生み殖えてきたのである」（111ページ）

この「原理講論」の記述は、いわば「靈的墮落のみのときの救援摂理」と呼ぶべきものであり、たとえエバが「靈的墮落」をしたとしても、もしアダムが成長期間を全うし「完成したアダム」になってしまえば、復帰摂理はごく容易に成されていました。しかし、アダムが完成できないまま、「肉的墮落」をすることで「サタンの血統を継承した人類が、今まで生み殖えてきた」というのです。結局、エデンの園のアダムは、エバを天使長から取り戻すことができませんでした。

それゆえ、人類歴史の終末期において、メシヤが来られたならば、メシヤは地上世界の「エデンの園」の中において、人間始祖アダムが果たしえなかつた責任である、上述した「靈的墮落のみのときの救援

摂理」の内容を「蕩減復帰」しなければならないのです。

ところで、失樂園前の「エデンの園」の中にいたエバは、「靈的墮落」をしたとしても、その時点においては、まだ「原罪」を持つておらず、「サタンの血統」にも連結されていません。すなわち、原罪とは「人間始祖が犯した靈的墮落と肉的墮落による血統的な罪」（「原理講論」121ページ）をいうのであり、エバの靈的墮落だけでは、エバの「自犯罪」であり、「血統的な罪」とはなっておらず、まだ「原罪」ではありません。事実、靈的墮落の時点において「失樂園」は起こつておらず、アダムが完成してエバを救済したならば、「失樂園」は絶対に起こりえなかつたのです。ゆえに「靈的墮落」が起こつた時点でのアダムとエバは、まだ「エデンの園」の中にいる状況です。

また、眞のお父様が「愛には縦的愛と横的愛があるのです。父子関係は縦的愛であり、夫婦関係は横的関係です。縦的愛は血統的につながり、夫婦関係は血統的につながりません」（「訪韓修練会御言集」12ページ）と語つておられるように、天使長とエバの靈的墮落は、横的愛の問題としての「偽りの夫婦関係」であり、その時点では、エバは「サタンの血統」に連結されているわけではありません。お父様が、「長子（アダム）が庶子のようになりました。血筋が変わりました。本然の愛を通して神様の血統を受け継ぐべきでしたが、（肉的）墮落することによって他（サタン）の血筋を受け継ぎました」（八大教材・教本「天聖經」186ページ）と語つておられるように、人間始祖アダムとエバは、「肉的墮落」をすることによつて「サタンを中心として四位基台を造成したので、サタンを中心とする三位一体」となり、サタンの血統に連結するようになつたのです（「原理講論」267ページ）。

それゆえ「原理講論」に記されているとおり、肉的堕落によりサタンを中心とした「悪なる三位一体」をつくる以前の靈的墮落のみの時点では、サタンの血統に連結していないため、「復帰摂理は、ごく容易であった」（1-1-1ページ）というわけです。

そして、メシヤが地上に来られるならば、地上世界において復帰された「エデンの園」で、人間始祖のアダム自身が果たせなかつた「エバを墮落圈から復帰して再創造し……」「サタン世界から奪い返して……」という「靈的墮落のみのときの救援摂理」を、メシヤご自身がアダムに代わつて蕩滅復帰しなければならないのです。

### ③「墮落圈から……」「サタン世界から……」というみ言は何を意味するのか？

ところで、地上において復帰（再現）された「エデンの園」には、人間始祖のときと同様、そこに、メシヤ（アダム）と三人の天使長、および独り娘（エバ）が存在することになります【左図を参照】。そして、復帰された「エデンの園」の中に入る独り娘は、やはり人間始祖のときと同様に、聖婚する前から、「神の血統」であり、「無原罪」なのです。この点については、前述した真のお父様のみ言のとおりです。

しかしながら、復帰（再現）された「エデンの園」にいる三人の天使長は、洗礼ヨハネ的人物をはじめとする「メシヤのための基台」として、メシヤご自身が「サタン世界」（墮落圈（墮落人類））で闘つて勝利して、取り戻してこなければならない基台なのです。前述したみ言の「エバを墮落圈から復帰し

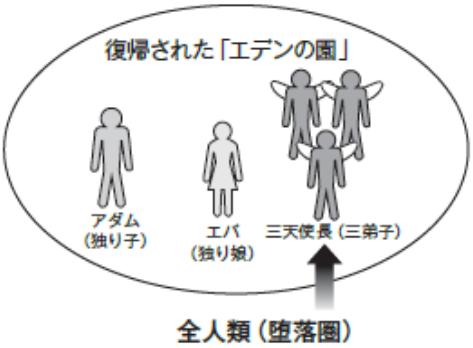
て再創造し……」「サタン世界から奪い返して……」という場合の「墮落圈」「サタン世界」とは、まさしくメシヤご自身が闘つて自然屈伏させて取り戻すという「三人の天使長」の状況そのものを指して語つておられるものです。すなわち、「墮落圈」「サタン世界」とは、具体的には、墮落した天使長圈のことを指しており、そこから取り戻すことを意味しているみ言なのです。

「三人の天使長」の基台が確立すれば、「エデンの園」が再現され、独り娘が顕現する条件が備わるということであつて、エバそのものが、「墮落圈」（墮落している）「サタン世界」（サタンの血統）という意味ではありません。再現された「エデンの園」にいるエバは無原罪であり、神の血統です。

したがつて、メシヤは命懸けでサタンと闘つて勝利することで、三人の天使長圈を自然屈伏させ、「メシヤのための基台」（三弟子）を確立しない限り、天使長圈（墮落圈）「サタン世界」からエバを奪い返して、「聖婚式」を挙げることができません。これらの二つのみ言は、メシヤ（アダム）自身による蕩滅、メシヤ（アダム）自身の責任について述べているものです。

一方、真のお父様が、前述のみ言で語つておられるように、「真の母」となれる「エデンの園」にいる独り娘は「墮落していない純粹な血統をもつて生まれた方」です。

ところが、その「独り娘」（エバ）の場合も、人間始祖のエバが「エ



「デンの園」で蕩減できず、歴史的に残してしまった「靈的墮落」の問題を、墮落したエバに代わって「蕩減」（「靈的墮落のみのときの救援攝理」）していかなければなりません。真のお母様が、一九六〇年のご聖婚以来、「神の日」宣布までの七年間、苦難の路程を歩まれたのは、人間始祖のエバに代わって「蕩減」され、「独り子（再臨メシヤ）」の前に完全相対である「独り娘」として立つためであったと言えるのです。

ただし、ここで勘違いしてはならないのは、真のお母様が「靈的墮落のみのときの救援攝理」をエバに代わって「蕩減」されるといつても、それは、お母様自身が「靈的墮落」をしておられるという意味ではないという点です。「靈的墮落」の罪を犯したのは、あくまでも人間始祖エバであり、お母様はそのエバを代理して「靈的墮落」を「蕩減」されたのです。

真のお母様は「無原罪」であられ、かつ「神の血統」であるがゆえに、長成期完成級をつましくとなく越えられ、完成期の七年路程を人間始祖エバに代わって歩まれることで、真の父（アダム）と共に、勝利された人類の「真の父母」となられたのです。